

機関員 宮 城 吉 男

「くろしお」は、糸満造船所で造られ1966年の8月15日に進水し、14年間に渡り漁業調査船として活躍し現在に至った。

「くろしお」の主な仕事内容として、大型魚礁調査、放射能調査、沿岸定線調査、えさの調査などいろいろありますが、特に僕が興味を持ったのはえさの調査である。えさの調査とは、沖縄の海では鰹を取るためのえさが確保できず、本土の方から取り寄せている次第なのです。このような問題をかかえては、漁業活動がおもうようにできないので、水産試験場では県内で直接確保できるように研究と調査を重ねています。これからも水産試験場がますます発展しますように。

漁業室 金 城 武 光

私と「くろしお」のつきあいは、昭和41年まだ船体が造船所のレールの上に乗っていた頃に始まる。

「くろしお」の種々の業績等は他の皆さんの筆に委ねるとして、私は航海中に起きたおもしろいできごとを書いてみたいと思います。

建造当時の「くろしお」は船内にトイレがなく、1m四方に高さ70cm程の箱を船の舷にひっかけて用便をしたものであるが、使用中は頭だけが見えるためその姿は卵をあたためている「アホウ鳥」そっくりで腹をかかえて笑ったものである。私が始めて使用した時「これはへたすると落ちるぞ」という予感だけが先にたち、出かかったものがひっこんだのを今でも覚えている。それからしばらくして私の予感が的中したのである。乗組員きっての巨漢であるM氏が用便中トイレもろとも転落してしまったのである。びっくりしたのは本人よりむしろ他の乗組員で、巨漢のM氏を船上へひっぱり上げるのに苦労したとか。それにしてもトイレとアベックで海水浴を楽しんだ話は前代未聞である。

目的地（調査地点）へ向って航行中に曳縄を流すのは「くろしお」に限らず、すべての漁船が行っている漁法であり漁獲物として、カツオ、マグロ、サワラ、シイラ等があるが、人間が釣れたのは聞いた事がない。当時20才に満たなかったT君、出港と同時に曳縄を流し終り、尿意を催したのでデッキから海へ向って放水すべく姿勢を整え「ヒョイ」と顔をあげると、岸壁でうら若き乙女が「くろしお」を見送っていたのである。純情なT君は一瞬うろたえたが気を取りなおし「アランタルフーナー」をして反対側のデッキへ行き、今度は注意深く周囲を確認してから同じ姿勢をとった。人間だれしも放尿時は安心しきっているものであるが、その時うねりで船体が大きく傾いたからたまりません。T君必死で手摺をつかもうとしたが時す